

染織工芸技術の変遷

—葛布の製作技法と用途を事例として—

深 津 裕 子

はじめに

布を作る技術は、様々な染織技術の発達を経て今日に至る。その起源は太古の人々が原始的な生活の中で山野に自生した樹皮や草皮を剥ぎ、編む、織るなどの技術を駆使して布を作った時代に遡る。楮、麻、藤、科、葛などによる布は「木綿」と総称されるが、葛布は、葛¹⁾の蔓から抽出した靱皮繊維を糸としたもので、古くは大宰府菖蒲ヶ浦一号墳から出土した鏡に付着した葛布が知られる²⁾。葛布は、庶民の衣類に広く用いられた一方、奈良、平安時代には貴族階級の喪服や蹴鞠のための指貫、江戸時代には武家の袴、袴、直垂、陣羽織、道中合羽の生地としても活用された。これはまた、布を製作する技術に文化、社会、経済や着用者の身分や趣向などが反映されているとともに、布作りが様々な用途に対応して行われてきたことを示している。このような絶えず変容していく染織技術を次世代に継承していくためには継続的な調査研究と保存および記録作成が必要である。

葛布の製作は日本全土で行われたものと考えられるが、鹿児島県薩摩川内市甕島、佐賀県唐津市佐志、静岡県掛川市などが製作地として知られてきた。原始的な紡織習俗がみいだされた甕島の葛布は、昭和四十五年に選択無形民俗文化財に指定された。唐津市佐志の葛布もまた庶民の衣類や粗布、魚網などに用いられたことで知られる。掛川の葛布は、江戸時代に武家の服飾に活用され地域特産品として名を博し、明治時代以降には襖紙や壁紙などに用いられ、戦後には民芸品への活路を見出し、昭和五十五年に「掛川手織葛布」として静岡県郷土工芸品の指定をうけた。

これまでの葛布を含む原始布に関しては柳田³⁾、岡村^{4・5)}の研究、甕島の葛布に関しては文化庁⁶⁾、下甕島役場⁷⁾の記録、千田⁸⁾の報告などがあげられる。そして佐志の葛布に関する野間⁹⁾、松尾¹⁰⁾、佐藤¹¹⁾ら、掛川の葛布に関する静岡県小笠社会科サークル¹²⁾、掛川手織葛布組合¹³⁾、内田¹⁴⁾、戸塚¹⁵⁾、外村^{16・17)}らの研究がある。これらはいずれも、昭和四十年代頃に染織工芸技術の存続が危惧され、各地方で葛布に関する調査や復元的研究が行われた成果である。また、葛布製染織文化財¹⁸⁾とその製作技術は数々の展覧会^{19・20)}で紹介されてきた。我々は幸いにして、今日ではもはや消滅してしまった葛布の製作技術を先駆者の記録から理解し、その発達過程を推察することができる。しかし、各地域において作成された記録をもとに相互の関係性に依拠した考察結果は未だ整理されていない。

本稿では、葛布の製作技術を研究の対象とし、これまでに行われた調査記録と史料を整理するとともに、染織工芸技術の記録と保存方法について検討することを目的とする。まず、先行研究による葛布の製作技術の記録資料から変遷の過程を整理する。次に、掛川の葛布に関する江戸時代後期から今日に至る資料から製作技術と用途の変遷を明らかにし、甕島や佐志などの九州地方で継承される葛布

との関連性を考察する。葛布製作技術を事例として、今日まで継承された染織工芸技術の変遷過程を整理するとともに、現存する技術をどのように記録および保存すべきであるかを検討したい。

一 葛布製作に関する記録

甑島の葛布に関する資料

「甑島の葛布紡織習俗」は、昭和四十五年三月に選択無形民俗文化財²¹⁾に指定され、鹿児島県教育委員会が記録作成を実施した²²⁾。その結果は『無形の民俗文化財 記録 第二十六集 紡織習俗II 島根県・鹿児島県⁶⁾』に収録されている。記録内容は、甑島の概要、甑島の衣生活（仕事着、普段着と晴れ着、機織仕事）、甑島と葛布、甑島の葛布の製作工程（葛と甑島、糸づくり、はた織り、織り方のいろいろ、染織）、葛布の利用と管理（葛布の利用、葛衣のいろいろ、葛衣の手入れ）からなり、平良、瀬上（上甑島）、青瀬、瀬々野浦（下甑島）などの集落で調査された写真を含む貴重な資料である。

また、『甑島郷土誌⁷⁾』にも、以下のように葛布の製作工程が記述されていた。

「くず布」はクズ（葛）の繊維（せんい）を原料にした織物のことである。クズは「カンネンカズラ」とも言って、甑島全島の山野に自生する植物で、根から「くず粉」も採取し、薬用、食用として利用する。

クズは、六、七月頃にツル（カツラ）がよく伸びるので、この頃山野に行って、今年伸びたものを、三メートルほどに切り、その場で皮（繊維のある部分）をはいで、束ねて持ち帰る。往時は、「クズの口開け」の日に採取したという。

持ち帰ったクズは、泥にふみこんでシブ皮を腐らすか、アク（木灰汁）で煮て川にさらし、よく洗ったものを踏みほぐし、乾かした繊維を小さくさいてつむぎ、糸車にかけて細糸につむぐ。

この糸を原料にして、地機（地ばた）で織った布が「クズ布」である。

山野からクズを採取して糸をつむぎ、地機にかけるまで約一ヶ月、一反のクズ布を織るのに約一年かかったといわれている。

佐志の葛布に関する資料

野間吉夫は、佐志（唐津市）の葛布について調査を行い、その記録を『佐志の葛布²³⁾』として昭和四十年に私費出版した。この書物は、「木綿以前」、「葛布再現」、「カンネカズラを採る老婆」の三章で構成され、葛布製作技術保持者からの聞き取り調査の内容や、製作工程を記録した写真が掲載されている。葛蔓から韌皮繊維を採取する方法を以下に引用した²⁴⁾。

カンネカズラを採るところは部落からちょっと離れた山ヒダ斜面であった。婆さんはさっそく採りにかかった。どうして木にのぼったのではなく、地べたに匍ったものでなければいけないのかと背中に問いかけると、のぼったやつはねじれていて皮をとるのに手がかかるといふ。また兩年はクズが半分もはわない、日年には水をのみに川まで匍うていくともいふ。婆さんはスジのいいのを見つけると鎌の先でひっかけてひっぱり、葉をしごいて一尋半の長さに切り丸くたばねる。

どこかでセミしぐれがきこえてくる。ひと通り写真をとったので帰ることにした。道々話をきいた。カンネカズラはいまから一番クズ、八月ごろ二番クズを採るが、二番クズをとるともうなくなるという。こうして採ったクズは大きな釜（六升炊き）で上から桶をかぶせて蒸して、横ヅチでたたいてもんで皮をへぐ（はぐ）。それを日陰のところで敷き藁の上に丸くたぐっておき上からカマギ（吠）をかぶせてヒシテ（一日）一回ずつ上としたをひっくり返して水をかけ、二日二晩くらいねまらして流れ川でこぐ。よくほめかせんと皮がおちんという。それを干してかわかした。一斤（六百グラム）三百円で売る。おとどしまでは二百円だったが、去年から三百円になった。むかしは野原を毎年焼きおったから、三十斤くらい採ったが、いまは、三、四斤くらいしか採れない。達者なもんには勘定に合わない仕事で、年寄りたちが遊ぼうよりかもとするくらいである。こうしたカンネカズラを採る女たちが、他にも二、三人いるそうである。みんな七、八十の年寄りであった。

佐志でかつて製作されていた「シキノ」は蒸籠に敷く粗布で、経糸と緯糸の両方に葛を用いたことで知られる。採取した葛を蒸し、韌皮と木質部を剥離させ、日陰に三日おいてときどき水をかけ、皮がむけたら川にさらして、しごき、塩水につけ、苧んで糸車にかけ、撚りをかけて棒にとって日に干す。機にかけて一反を三日ほどで織り上げるが、当時シキノ織に従事していたのは四～五名の七十歳以上の女性ばかりであったという²⁶⁾。

唐津出身の染織家である松尾鏡子は、佐志に伝わる葛布製作技術を当時八十歳であった末長スマから習得し、昭和五十八年には野間が口承を記録した宮崎マセから佐志葛布の振織を伝承し地機を復元した¹⁰⁾。このように佐志で消滅しかけていた葛布製作技術が、野間により記録され、松尾により伝承および復元がなされたことは非常に貴重な事例である。

掛川の葛布に関する記録

江戸時代後期

江戸時代後期に宮崎安貞、佐藤信淵とともに農学者の一人であった大蔵永常（一七六八～一八六一）は、文化元年に『老農茶話』を刊行し、シナノキの樹皮から繊維を取り縄や布を製作する方法を述べ、天保十一年には『製葛録』を刊行し、葛の植物的性質、葛粉の採取法、葛布の製法について詳しく述べている。『製葛録²⁶⁾』より葛布製作に関する項を村井²⁷⁾が解説したものを以下に、挿図を図一～五に示す。

葛布乃事

葛布を製するは遠州掛川辺ばかりにて余国に製する事を聞かず。このほとりの人に聞くに葛根を掘て葛粉に製する事詳しからず。小夜の中山辺の山々に専ら生ずる蔓を取りて布に製す。さてまた日坂の名物蕨餅と称するものは蕨にてはなく皆葛餅なり。この葛粉はその所にて製するにあらず。その辺の山方より製し来るを調べ、又は他国より来れるを求めて餅に製するなり。日坂の人予に葛粉の製法を教えよと云いしことあり。予はこの辺りを往来する事あまた度にして殊に遠州の地には知己多ければこの葛布を織る事を委しく問いて記し置きたるを特に出すなり。

葛の蔓を刈る事

先、山に入りて蔓を刈り取り、その日鎌に甑を仕掛け蒸すべし。又は湯をたぎらしその中に漬け、ゆですぎざるようざっとゆでてよし。然して後、浅き河に漬け置く事一日一夜にして引き上げて、土間にこもを敷き、その上において上よりこもをたくさん取りかけ、又その上に青草を切りかけ寝させて三日目の朝こもをめくり取れば、湯気たちて熱くなりいるなり。この時中水を打つとて水を打ちかけ、又元の如くして一日置いて引き上げ、河へ持ち行きよく踏み洗い上皮を去り、家に持ち帰りて皮を剥ぎ、元末交じらざるよう揃えくくり、竹にかけて干しあぐるなり。

○又皮を去り、洗いて白水に一日一夜浸し置き河にて洗うべし。

○この中水を打つ事は大事にてこれをせざれば芋□るといへり。

糸の製

干しあげたる芋を程よく裂きて、悉く女の糸結びに結び継ぎて、継ぎ目の角を挟みにて切り、芋桶に繰り入れ繰り入れして置き、糸にせんとするとき水を吹きかけ又は水に暫し漬けよく水をさり、それより車にかけてよりをかけ管になして織るなり 葛布というはみな経は木綿糸にして緯は葛の糸を織り入れたるなり

○短尺というは袴地の事なり

壱反の緯（葛糸）掛目五十目宛

一反の経ての木綿糸は片羽入れなり これを平織りという

○長尺というは上下地のことなり

一反の緯（葛糸）掛目七十目

一反の経諸羽八ツ半（なから）の箴に入るなり これを諸織という

その他合羽地等はこれに準じて織るなり極上の芋のよきところを細く裂き継ぎて経糸も吟味して織るなり。

○木綿を織る如くはた糸にて経をこしらえ緯に葛芋（くずそ）を織るなり。

総てに木綿を織るに同じ。尤も葛糸は結び継ぎたるもの故織りたる裏表に結び角出るなり。面は織る程で鋏をもて切り取り、裏は織り上げて切るべし。

上品下品は糸の仕様にてはかるなり。

一 諸織の極上々の上下地 白にて一反

金貳部貳朱位

下品は金壱分貳朱位

一 同 染袴地壱反 多く花いろなり

金壱分前後

下品は銀十三匁

一 平織袴地一反に付

銀十匁位

下品は銀八九匁

右は掛川にて調取の値段なり。

それ葛布はいづくにても出来ざる事はあらざれども、只その事とばかり思いて、前にもいう如く遠州にては根を掘りて葛粉とすることまれにして、他方より求めて用い、九州などにては蔓をとりて布に織る事とは聞くなから、これを織見んとせずして葛布を求めて用いぬ。みな心を深く用いざるによりてなり。

明治時代

明治五～九年に刊行された丹波修治等著、溝口明耕等画『教草27』の「教草第七 葛布一覽²⁸⁾」には、明治時代初期の掛川における葛布とその製作工程が挿画とともに以下のように記されている（図六）。

葛ハ荳科の宿根草にして其形鵲豆、菜豆に其だ似たり、然れども茎葉共に毛ありて蔓至て強く其実食ふべからず。此草諸国山野隨地に自生あり、各地に於いて其根より澱粉を製取し之を葛粉といふ。又遠州掛川駅にてハ葛を以って芋に製し布を織り一個の名産とす。其草ハ同駅の東北なる倉真村より松葉大沢といへる他、及び小夜の中山の南なる富田村等の諸山野より産出す。殊に周智郡森町の北面なる虫生村、野辺村の山より出す品を以って上品とす。抑々葛布を製し始しハ、何れの頃なるや詳ならずと誰も為相卿此地の葛布を詠ぜる歌あれば、今を距る事、凡六百八十年余の前より既に布にハ織りしなるべし、今次も葛布を製する概略を述ぶ、粉の事ハ別に澱粉類の編に著ハすべし。

此草の蔓秋月に至れば、二丈より參上余に延ると雖も、芋に製するにハ五月節の頃より凡五十日許の間に葛取るを善とす。初ハ其蔓長サ七尺許中頃ハ、九尺許後にハ一丈二丈程に至る、然れども根より上三、四尺迄ハ質悪しければ之を残して蔓取るの長さ三、四尺より六、七尺許なり。蔓て後ち日を経るを忌む故に其日の内に釜中の沸湯に投じ暫時間凡（二半秒時）にして上下を攪拌せ、又沸騰攪拌せること暫時間（凡二秒セコンド）時半にして取出し、一昼夜河水に浸し置き、後取揚げ地に藁薦を敷て積上げ其上に敷板を藁薦を掩ひ置く、斯の如く二昼夜にして掩ひし藁を除き去れば、蔓ハ温醸して蒸気を発す、之に水を灌ぎ蒸気の止むを度とす之を中水といふ。

又前の如く藁を掩ひ置くこと一昼夜の後浅き河に浸し、足にて踏み皮を剥ぎて中心を去り、本を揃へて凡三十本を一把とし、片手に細竹管の長二寸余なるもの二本を持ちて之に挟み、水中にて扱くこと数回にして潔白色となるを竹竿に掛け晒し、全く乾かざる前に取入れ手にて屢振れば、其皮の纖維互に分れて芋の状をなす、然して後全く乾し収む是即ち葛芋なり。

葛芋を以って糸に製するにハ、其最佳品を選ミ拇指と食指にて細に裂分け糸結びに結び付け、結節より長く出たる糸の端ハ挟みにて悉く剪去る。此結び揚げたる糸を『ツグリ』と唱ふ。之を芋桶に繰込ミ其儘笊籠に入れ水に浸し取出し、水をきりて夫より拇指と小指へ綾を取りて巻き掛け小把となし緯の用とす、葛布ハ緯に葛布を用るのミにして経ハ必ず絹、麻、綿等の糸を用るなり。

織機ハ尋常の具に異なることとなし、唯緯を水に湿し杼の中へ収め梭に随ひ緯の結節を引揚げ織上げて後、鋏にて剪取り其布を浄水に洗ひ乾し、再び湿し卷砧へ掛け徐々に撃ち、布に光沢を生するを度とし種々の色に染むるなり。後伸子にて張り共糊と称する糊（葛粉十匁水四百匁）を刷毛にて布の裏面に引く、是を葛布の仕揚げとす。

葛布ハ水に濡て柔軟となることなく、又湿りて速に乾く故に雨衣、袴などに用い、また広幅のものハ裱褙地の用に供すれば当今多く製出せり。葛苧製造人ハ掛川駅鈴木源平を第一とし、織工は同所榎原久明、佐藤邦好、松本善長などの数家ありて高村、兵藤等の家にて葛布を取扱ふなり。同所一ヶ年織上高上、中、下平均して、凡六万反、及此売価凡金四万九千二百円なり。

また、明治四十四年に柳田²⁹⁾は、藤が元来葛類の総称であることから、素材としての藤と葛が混同されていた可能性を「昔の藤布の中には紫の藤ではなく、たとえば貴人の喪服にも用いられたという藤衣などは、或いはまた別種の葛の繊維をもって覆ったものだったのかもしれない。『北越雑記』に北蒲原郡の加地庄の辺で藤布というのは全てクズ、すなわち秋になって深紅の花を開く葛の皮で製したもので、主として袴かみしもなどの用に製して販売していた。蹴鞠の遊びの時には袴は必ずこの葛布の袴で、その供給地として昔から有名だったのは遠州の掛川地方であった。³⁰⁾」と指摘した。

昭和時代

静岡県小笠社会化サークル（代表：松本方之）は昭和六十一年に、葛布に関する調査記録と研究および教育普及を目指し『郷土の伝統工芸織 掛川の葛布』を刊行した。これは、掛川に伝わる葛布の歴史と製作技術に関する綿密な調査研究活動を行い掛川の葛布製作の推移の全容を記録したものである。この記録には、掛川手織葛布組合が昭和五十七年に作成した「葛苧製造の手引き」も掲載されている。各工程を製造の時期、生蔓の性質、生葛の採り方、束の作り方、葛苧の製造（生蔓の煮方、水漬け、寝かし方、丸洗い、芯抜き、苧洗い、苧晒、仕上げ洗い、苧の乾し方）、荷の造り方、苧の品質、葛つぐり、葛布の織り方に分けて詳細な手順が記録されていたことがわかる（詳細は表一参照）。

掛川の葛布作りのあゆみについては、記録をもとに以下に要約した。

東海道の掛川宿および掛川城を中心に、袴や道中合羽、陣羽織など武家の服飾に活用された結果、需要と供給のバランスがとれた地域特産品となり、「葛布は町や村の女の人は、もちろんのこと、武家の子女の内職としても織られていた。武家の子女が織る葛布は大変柔らかく葛布問屋は喜んで引き取っていった³¹⁾」とし、安政の頃に掛川藩の許可を得ていた葛布問屋は十二件³¹⁾であったが、明治維新後に葛布の服飾としての需要が消滅した。葛布の用途は、明治十年頃³²⁾よりふすま紙、明治三十年頃³²⁾より壁紙へと切り替わり、大正時代から昭和にかけては葛布のほとんどが壁紙用に製作され、韓国からも葛苧が輸入された。当時は掛川のどの農家にも必ず織機が置かれ副業として葛布が織られた³²⁾というが、葛布の生産は第二次世界大戦とともに一時中止された。昭和二十三年に葛布製壁紙の製造が再開され³³⁾、アメリカへの葛布製壁紙の輸出が増加し、韓国からの葛苧の再供給により生産を伸ばしたが、昭和三十六年に韓国製葛苧の輸出が禁止された。この時、約八千人いた葛布製造にかかわる人員が昭和四十年には五百人に減少した³³⁾。そのなかで川出幸吉商店二代目の川出茂市が、葛布の活路を民芸品の分野へ見出し功績を残し、先述したように掛川手織葛布が昭和五十五年に静岡県郷土工芸品に指定された。昭和五十九年に葛布製作に従事していた業者は、掛川手織葛布組合加盟十件（磯辺葛布店、岡本葛布工房、小崎商店、川出幸吉商店、村松葛布店、今駒商店、鈴勝商店、沢野商店、掛川葛布工業、服部壁紙店）、静岡壁紙（金谷）、羽衣壁紙（清水）³⁴⁾であった。

小笠社会科サークルは、掛川の葛布産業の将来のために検討すべき課題として、原料の確保、「葛つぐり」の工程、「織り」の機械化、新製品の企画・デザイン開発、販路の開拓、経営、葛布の生涯学習プログラム、観光資源化、学校教育との関連化、国・地方自治体の振興策・援助策などを挙げている³⁵⁾。この取り組みは、今日の葛布技術保持者らに継承されている。

二 葛布製作の現状

平成十九年に葛布製作の現状を鹿児島県薩摩川内市下甕島、静岡県掛川市、静岡県島田市金谷で調査³⁶⁾した（以下甕島、掛川、金谷とする）。

甕 島

甕島では昭和四十五年に、上甕島の瀬上、下甕島の青瀬、瀬々賀浦集落において葛布製作が行われていたとされるが、現在では行われていなかった。下甕島に所在する下甕郷土館³⁷⁾は昭和五十七年に設立され、甕島の風俗、習慣、産業などの歴史の変遷を知るための資料を町内外から寄贈、寄託をうけて展示および保存を行っていた。館内には島民の衣食住と生産・生業に関する資料が収集および展示されていた³⁸⁾。衣類に関しては、葛布製品では「クズタナシ半襦袢³⁹⁾」（図七）、「クズタナシ長着³⁹⁾」（図八）の二領が、「ビーダナシ」と呼ばれる芙蓉の木から採取した繊維を糸にして地機で製織した着物一領、古着を利用して製作された綴織の「ニンプ」「ダイニンプ」、刺子の袖付仕事着の「ドンザ」、刺子の袖無し仕事着の「シカタ」などが現存していた。また復元された武家屋敷には地機と糸車が展示されていた。現在、瀬々野浦集落では、葛布の製作は行われていない。代わってビーダナシ（甕芙蓉布）の復元が瀬々野浦集落で行われ、伝統工芸品として評価が高い⁴⁰⁾。

掛川・金谷

掛川では現在、掛川葛不織物組合⁴¹⁾に登録された三件（岡本葛布工房⁴²⁾、小崎葛布工芸⁴³⁾、川出幸吉商店⁴⁴⁾）、金谷（現島田市）の一件（静岡壁紙）⁴⁵⁾が葛布製作を行っている。川出幸吉商店は、民芸領域において葛布製作技術の活路を切り開くとともに、合成繊維と葛布を組み合わせ社会性や時代性を反映した葛布作りを行ってきた。川出英通から掛川における葛布生産の歴史、民芸品としての葛布に活路を見出した先代の取り組み、葛布の製作工程、神社に献納する葛布などについてご説明いただいた。店内には明治から昭和にかけての葛布製作の様子を撮影した貴重な記録写真が掛けられており、「こたけや」という旅籠から引き続く川出幸吉商店の葛布と関わる歴史が今日に継承されていた。また、小学生の葛布体験学習など葛布製作を通じた教育普及活動も活発に行われていた。

岡本葛布工房は、型染めした葛布に和紙を裏打ちした壁紙を戦前に欧米に輸出したことで知られ、手織り壁紙「遠州織」で知られる。平成十九年八月現在は老朽化した工場の改装のため閉店していた。小崎葛布工芸は、掛川城の門前という立地条件を生かし幅広い葛布製品の製作に加え、広幅の織機を駆使した輸出用のカーテン、すだれ、のれんなどを扱っていた。

静岡壁紙株式会社は「大井川葛布」として知られ、壁紙、室内装飾、和装品、服飾雑貨など幅広い

用途の葛布製品を扱う。毎年、生蔓採取も終盤を迎えた八月頃に葛布ワークショップを実施しているため、筆者も平成十九年八月に参加した。そこでは県内のみならず関東、九州、沖縄からの参加者が、生蔓の採取から製織および仕上げまでの葛布製作の全工程を体験する中で様々な知的情報の交換が行われた。主催者で葛布製作の技術保持者でもある村井龍彦、村井良子は、葛布の製作技術と知見を惜しみなく受講者に提供し、葛布製作の普及的活動を行っていた。また、芭蕉布、苧麻など他の原始布の技術保持者らとの積極的な意見や情報の交換がみられた。筆者の研究者としての立場からは、このような技術保持者たちの取り組みを高く評価するとともに、継続的な調査と製作技術の記録および保存方法の体系化、技術保持者らとのネットワークづくりの必要性を強く感じた。

掛川の葛布製作は、上記の技術保持者らにより受け継がれ、民芸、室内装飾、現代服飾などの領域に活路が見出されていた。加えて、伝統的服飾生地継承の活動として、神事や蹴鞠用生地が川出、村井らにより製作されている。さらに、現存する葛布製服飾品を手がかりに製作技術の分析および復元的研究が積極的に行われていた。掛川・金谷の技術保持者らのアプローチは、葛布製作技術を秘儀として独占するのではなく、むしろ普及させようとする意欲と、葛布を単に伝統工芸品として扱うのではなくその時代に即した葛布の用途を積極的に探求する姿勢を示している。つまり、葛布は古代布でありながらも今日の社会に十分に対応できる現代布であることが技術保持者らにより提唱されていた。

三 葛布の製作工程

葛布に関する資料から製作技法を抜粋して整理したものを表一に示す。九州地方の記録として甑島葛布の記録（昭和四十五年）、佐志葛布の記録（昭和四十年）、掛川葛布の大蔵永常『製葛録』の記録（文化十一年）、丹羽修政治の葛布一覧（明治5年）、掛川手織り葛布組合（昭和五十七年）、大井川葛布（平成十九年）をあげた。また大井川葛布が開催した平成十九年ワークショップにおける葛布製作工程の記録写真を図九に、技術保持者の製作を図十に示す。

四 葛布の製作工程にみられる各地の特徴

五件の記録をもとに、葛布の各製作工程を比較した。以下、五件は地域名と記録年代を用いて甑島、佐志、掛川（江戸）、掛川（明治）、掛川（昭和）、金谷として述べる。

葛の採取

葛布の原料となる葛蔓を採取する作業の前の「山焼き」は甑島でのみ行われていた。全体を通じて葛蔓の採取時期は夏（五月下旬から八月までの間）で、一番蔓がもっとも好ましい。葛の採取方法は約二、三メートルの蔓を刈り取ることで一致していた。甑島では生蔓の採取時に、外皮・韌皮部から木質部を分離する作業が行われていた。

韌皮繊維の抽出法

生蔓から糸に用いる韌皮繊維を抽出するために、蒸す、煮る、叩く、醸酵などの処理がなされていた。甑島では生蔓を煮る際に木灰を入れて煮ることにより外皮を韌皮繊維から分離させた。一方佐志では、生蔓を蒸した後に槌で叩き揉むことにより、木質部と韌皮部を分離させた。その後、室で葛の醸酵を促して洗うことにより外皮と韌皮を分離させた。また、掛川、金谷でも、葛蔓を茹でた後、室で葛を醸酵させてから洗い、外皮、韌皮、木質部を分離した。いずれの地域においても、川の清流で濯ぐことにより韌皮繊維から外皮や汚れを除去することが、美しい葛苧を作るために重要な作業として行われていた。

糸づくり

布を織るための糸を作る。糸に苧む手法は各地域において共通していた。ただ、甑島、佐志、掛川（江戸時代後期）、掛川（明治）で糸をどのように結んだのかあるいは撚りつないだのか資料からはわからなかった。松尾は、1972年の佐志での糸積みについて、「無撚り糸は、必要な太さにさき、結んでつなぐ。撚り糸は①必要な太さにさき、二本平行に揃えながら撚りつぎをしてつなぐ。②糊づけをする。③糸車で撚りをかける。④木杵に巻き取る。⑤表面の羽毛を毛焼きする。⑥杵のまま乾かす。」としている⁴⁶⁾。掛川（昭和）と金谷では葛苧を裂いて「葛結び」を行うことで共通した。

甑島、佐志、掛川（江戸時代後期）では葛糸に撚りをかけ、経糸と緯糸に用いた。一方、掛川（明治・昭和）、金谷では葛糸に撚りをかけず、緯糸のみに用いた。甑島では、撚った糸を管に巻き取り杼に収めた記録写真⁴⁷⁾が見られる一方、掛川（明治・昭和）、金谷では糸を「8」の字の綾状にした「つぐり」を杼に入れることから、平葛と撚り葛糸では扱い方が異なることがわかった。

製織

葛布を地機（居座り機）あるいは高機で製織する。甑島では一部の高機が導入された地域でのみ高機が、それ以外の地域では地機が用いられた。佐志でも地機が用いられた。掛川（江戸時代後期）で地機が用いられたという記録は見られず、掛川、金谷では高機が用いられていたようである。葛布には、平組織で織ったものと、拵織されたものがあった。

用途

葛布には非常に幅広い用途が見られた。甑島では日常着、仕事着、袋、漁網に、佐志では蒸籠用粗布、魚網などに、掛川（江戸）では武家の袴地、袴地、合羽地に、掛川（明治）では雨衣地、袴地、襖地に、掛川（昭和）では色紙かけ、小物、甚平、襖地、壁紙地、カーテン、すだれに、金谷（平成）では、着尺地、帯地、手ぬぐい、小物、壁紙地などの用途がみられた。日常着や民具の領域では比較的目の粗い糸に撚りをかけた葛布が、武家の服飾や明治時代以降の葛布には、経糸に絹、麻、木綿、緯糸に撚りのない葛が用いられた。

このように今日に至るまでの葛布には非常に幅広い用途が確認された。葛布は、同じ韌皮繊維による他の古代布とは特徴や技術変遷が明らかに異なり、古代布の領域を超え現代布に変容していた。

表1 葛布の製作工程の比較

| | 出典 | 『甌島の葛布紡織習俗』 | 『佐志の葛布』 | 『製葛録』 |
|----------|-----------|---|---|---|
| | 著者 | 文化庁文化財保護部 | 野間吉夫 | 大蔵永常 |
| | 記録年 | 昭和四十五年 | 昭和四十年 | 文化十一年 |
| | 地域 | 鹿児島県川内市甌島 | 佐賀県唐津市佐志 | 静岡県掛川市 |
| 葛の採取 | 山焼き | 一月頃 | 記載なし | 記載なし |
| | 時期 | 六月（葛の口開け） | 一番葛は七月、二番葛は八月 | 記載なし |
| | 伐採 | 茎が青く節目の長い蔓を引きだしで鎌で切る。皮をむく。一握りずつ束ねる。 | 地べたに這う蔓を鎌の裂きでひっかけて引っ張り葉をしごく。一尋半の長さに切り、まるく束ねる。 | 山に入り葛を刈り取る。 |
| 靱皮繊維の抽出法 | 茹でる又は蒸す方法 | 大きい鉄の平鍋に水を七分目まで入れ、葛の皮を入れる。木灰をかけ半日煮る。瀬々野浦では皮を束ねたまま水に浸し、木灰をつけてから平鍋に入れて煮る。瀬上では皮を束ねたまま入れ、上から灰をふりかける。親指と人差指でつまみ、外皮と繊維がつると離れるのが目安である。 | 六升炊きの大きな釜で上から桶をかぶせて蒸す。槌で叩いて揉み皮をはぐ。 | 葛を刈り取った同日に釜で蒸すか、湯をたぎらした中に漬け手早く茹でる。冷めてから、浅い河に一日一夜浸ける。 |
| | 醸酵 | | 日陰に藁を敷き、丸い把状におき、カマギを被せ、一日一回づつ引っくり返して水をかける。二日二晩くらいおく。川で洗う。 | 土間に藁を敷き、その上において上に藁を沢山かける。さらに青草を切りかけて三日間寝かせ、朝になったら藁をめぐりとる。すると湯気がたつほど熱くなっている。水を打ちかけてさらに一日おく。河に持ち運びよく踏み洗いすることで上皮をとる。 |
| | 芯抜き | | | 家に持ち帰り皮を剥ぐ。根本と先が混じらないように揃え、竹にかけて干す。 |
| | 苧晒 | | | 白水に一日一夜浸しておく。 |
| | 洗い | 川の緩やかな流れに漂わせながら指でしごいて外皮を除去する。洗いあがった繊維はうす緑色である。 | | 川で洗う。 |
| | 乾燥 | 竹ざおにかけて日に干す。よく乾燥すると白っぽい繊維になる。 | 干して乾かす。 | 干す。 |
| 糸づくり | 葛つぐり | もみほぐした繊維を苧桶に入れ、太い繊維を適当に裂いて細くし、二本ずつより合せてつないでいく。 | 塩水に浸けて糸に苧む。 | 干した苧を程よく裂き、糸結びで結び継ぐ。継ぎ目は挟みで切り、苧桶に繰り入れる。 |
| | 撚りかけ | 績んだ糸を苧桶から出し、水を掛けて湿気を与え糸撚り車で約一メートルの糸に四～五回撚りをかける。竹管に巻き取る。カセを作る。杵に掛ける。 | 糸車で撚りをかける。杵にとり日に干す。 | 水を吹きかけるか水に浸して水気を絞り、糸車で撚りをかけ、管に巻き取る。 |
| 製織 | 織機 | 地機、高機（瀬上地域） | 地機 | 挿図によれば高機 |
| | 経糸 | 葛撚り糸、木綿糸、絹糸、麻糸 | 葛撚り糸 | 木綿糸 |
| | 緯糸 | 葛撚り糸 杵から小型の竹管に巻き移す。杵に入れる | 葛撚り糸 記載なし | 葛撚り糸 記載なし |
| | 織組織 | 平組織 | 平組織、振組織 | 平組織 |
| 仕上げ | | 織り目をそろえるために二人で向き合って座り、布を両方から引っ張る。 | 記載なし | 葛の結び目を切り取り、へらのようなもので艶をつける。 |
| 用途 | | クズタナシ、セガミタナシ、ノリコン袋、アマメタブ（アマメ袋）、魚網（かます網）、地びき網のトリ袋 | シキノ（蒸籠に敷く洗い布）、オゴケ（振織の魚網） | 袴地、裱、合羽 |

| 『葛布一覧』 | 『葛苧製造の手引き』 | 『葛布ワークショップテキスト』 |
|---|--|---|
| 丹波修治 | 掛川手織葛布組合 | 大井川葛布 |
| 明治五～九年 | 昭和四十五年 | 平成十九年 |
| 静岡県掛川市 | 静岡県掛川市 | 静岡県島田市金谷 |
| 記載なし | 記載なし | 記載なし |
| 五月から五十日位の間 | 五月下旬～夏至又は七月中旬 | 五月下旬から七月 |
| 根より三、四尺を残し、六、七尺を取る。 | 柔軟な蔓で、三メートル以上に伸びたものを選び根元から切る。葉は蔓の根元から先に向かってこきおろし、葉柄を残し葉だけを取り落とす。採取した蔓をまとめて、疵をつけないように根本を揃えて縛る。蔓が乾燥しないように注意する。 | 大井川の河川敷付近で葛を採取する。新芽で真っ直ぐなものを根本から斜めに鎌を入れる。葉柄をおとす。長さ二メートル位に揃え、乾燥しないように輪束にしてビニール袋に入れる。 |
| その日のうちに釜に湯を沸騰させて葛を入れ暫時攪拌する。一昼夜川の水に浸しておく。 | 釜に八分目まで水を入れ十分に沸騰させる。葛束を入れ煮立つまでまんべんなく煮る。葛は煮ると紫色から鮮やかな緑色、次に黄色に変わる。煮あがった葛を水に浸ける。鉄・硫黄・塩分を含まない河川の水を利用し、川底に蔓を沈める。重石を乗せて七、八時間から十二時間清流に浸したままにする。 | (公共の場で火を焚くことができないので以下、工房で行う。) 葛束を水に浸ける。鍋に湯を沸騰させておく。葛の蔓を入れ沸騰後二十分程茹でるあるいは蒸す。ゆであがったら水に浸けて冷ます。 |
| 藁薦を敷き上にも藁薦をかけ、二昼夜おくと、温醸して蒸気を発する。中水をさす。一昼夜おく。川に浸す。 | 水はけのよい場所を三十センチ程掘り下げ、草を刈り敷き詰める。水気を切った蔓の丸束を並べる。上と周囲を青草で厚く覆う。さらに藁かビニールシートをかけて密閉する。四十八時間程寝かす。温度調整が重要である。清流で外皮を洗う。洗った蔓を乾燥させないように注意する。 | すすきを刈り、室を作る。冷めた葛束を縦におき、すすきで覆いビニールシートをかける。発酵の進み具合を時々確かめる。室から出してビニール袋に入れ、河原に移動する。葛束の輪を解き清流に浸ける。 |
| 足で踏み川を剥いで中心を取る。本を揃えて約三十本を一把とする。 | 蔓の根と先の部分を混ぜずに揃え、木質部(茎の芯)を取り除く。頭部を掴み下に向かってしごき下すと鞣皮が木質部から剥離する。芯を抜き取り糞虫状に残った靱を伸ばす。親指と小指で千鳥にかけて「手がな」にし、水に浸ける。鞣皮と木質部の間に芋綿がある場合は芋の品質が落ちるので除去する。芯を抜き取った鞣皮の内面を洗う。「手がな」を解き水に流し振り濯ぐ。 | 清流で外皮を濯ぎおとす。表皮と木質部を分離させる。葛苧を再度手で洗い残った皮を除去する。 |
| 片手に長さ二寸の細い竹管を持ち葛を挟み、水中で扱くと潔白色になる。 | 米研水に約半日浸ける。 | 清流に晒す。 |
| 記載なし | 洗い乾かす。「手がな」を解き、水中で黒皮の残りを除去するように濯ぐ。 | 水中で濯ぐ |
| 竹竿に掛け晒す。半乾きの段階で手で振ると繊維わが分かれて苧の状態になる。 | 苧を振り散らし乾燥させる。河原などに平干しにするのがよい。半乾き状態で抜き縮みを伸ばす。晴天で三十分干し、頭部をまとめて束にする。 | 河原で干して乾燥させる。 |
| 親指と人差し指で細く裂き分けて結び、糸端を挟みで切る。苧桶に繰りこみ水に浸し、取り出して水をきり、親指と小指で緩をとりながら巻き掛けて小把としたものを繰糸にする。 | 葛苧を裂き幅二、三ミリにする。端を唾液で濡らし「葛結び」で結び、糸は苧桶に入れ、絡まないように裏返す。大豆や小豆などの重しをおき、「つぐり」をつくる。「つぐり棒」に「8」の字を描くように若いきゅうりくらいの大きさに巻き、三ヶ所を横に止め巻きする。 | 葛苧を裂き、葛布結びでつなげる。苧桶にいれつなぎおえたら桶を裏返し、つぐりを作る。 |
| 記載なし | 記載なし | 記載なし |
| 挿図によれば高機 | 昔は居座り機、今は高機 | 高機 |
| 記載なし | 綿糸、絹糸など | 手細綿糸 |
| 葛糸(撚りなし) | 葛糸(撚りなし) | 葛糸(撚りなし) |
| 綿糸を水に浸し杼の中に取り入れる。 | 「つぐり」を水につけ、よく絞って杼に入れる。 | 「つぐり」を水につけ、よく絞って杼に入れる。 |
| 平組織 | 平組織 | 平組織 |
| 挟みで端を切り、洗浄し、乾かし、再び湿らせて砧打ちする。染色する。伸子に張り葛粉の糊を刷毛で裏面に引く。 | 布表裏にでたひげや葛苧の結び目を切る。これを「しけとり」という。砧とよばれる槌でたたき、艶をだす。 | 「しけとり」を行う。砧打ちをしてはりと艶をだす。 |
| 雨衣、袴、襖地。 | 色紙かけ、小物、甚平、襖地、壁紙用、カーテン、すだれ。 | ワークショップではテーブルセンターを製作した。大井川葛布では、着物地、帯地、タオル、小物、壁紙等を製作している。 |

葛布の特徴

葛布の特徴は、甌島や佐志の葛布に見られる経緯に撚り葛糸を用いた例と、掛川や金谷の葛布に見られる平葛糸を用いた例に大別された。前者は糸車により葛苧に撚りを掛け糸管に巻き取るが、後者では撚りをかけずに「つぐり」にする。前者が生活に根ざした衣類や魚網に、後者は江戸時代の袴、陣羽織、道中合羽、直垂などに用いられた。糸づくりは、葛布の用途や、要求される機能性に深く関係していた。

江戸時代後期の掛川の葛布製作を記録した『製葛録』には、掛川の葛布が武家の袴などに用いられると記述されている。しかし、その製作において葛苧には糸車を用いて撚りをかけるとあり、挿図に糸車がある。文化十一年頃までは、葛布の糸に撚りが掛けられていたのだろうか、今後、製作年代が知られる葛布資料を研究することにより解明してゆきたい。

これに対し、明治時代初期の記録である『葛布一覽』では、糸に撚りをかけることには言及されていない。糸撚りの有無は、葛布製作技術の発達過程に加え、製作者の階級や生地の用途に対して異なる糸作りがなされた結果とも推察される。従って掛川においても、庶民の着用する葛布の糸には撚りを掛け、武家の服飾地の糸には撚りを掛けなかった可能性も考えられるが、今回の調査では真相を究明することはできなかった。また、九州地方と静岡の葛布製作の変遷過程における関係性を実証するまでには至らなかった。今後、各地の資料と製作技術を比較検討するとともに、技術保持者らのネットワーク作りによる情報交換などから、その詳細を解明していくことが一つの課題である。

また、柳田²⁹⁾が藤布と葛布の混在を示唆したように、これまで漠然と「木綿」「太布」「原始布」と総称された科布、藤布、葛布、芭蕉布などが、染織資料の材質において混在している可能性が高い。例えば、村井⁴⁹⁾は日向田資料館所蔵「芭蕉布火消羽織」は芭蕉布ではなく葛布の特徴を強く示していると指摘する。このように、現存する染織資料の材質を技術保持者らと共に再検証していくことも今後の調査研究において必要である。

五 無形染織文化財の記録と保存

葛布製作技術を事例として、染織工芸技術の記録と保存に関する調査研究に関する考察を行った結果、必要と考えられた項目を以下に述べる。

- ・継続的な記録調査を行うこと
- ・各地域に現存する文献資料と情報を収集し整理すること
- ・現存する古代布を用いた染織資料の材質を再検証すること
- ・各地域に現存する染織資料や素材および紡織器具の保存に努めること
- ・技術保持者の復元的研究などの取り組みを記録（映像を含む）すること
- ・研究者と地域における技術保持者のネットワークを形成すること

このような研究手法はすでに民俗学的調査の記録と保存研究において行われているが、工芸技術に対しても実施できるようなシステム形成とその普及が今後の課題である。

おわりに

葛布製作に関する幾つかの調査記録と資料を分析した。木綿が普及する以前、雑草として蔓延る葛の蔓を原料とした布づくりは、葛が生育する至る地域で行われていたと考えられる。その用途は幅ひろく、庶民の衣類に加え、奈良、平安時代には貴族の服飾、江戸時代には武家の服飾に、明治時代にはふすま紙、壁紙として欧米にも輸出されて人気を博し、今日では、民芸品、室内装飾、和服および和装品、服飾、装身具、雑貨として、その生産が継承されてきた。このように、葛布は、社会や時代の需要に応じて用途を変容させながら今日にまで生き延びてきた染織布であるといえる。また、雑草ともいえる葛を利用して織布を製作する手法は、我々が二十一世紀に抱える地球環境問題や環境保全とも密接に関わるエコロジーに配慮した素材であることが示唆された。

謝 辞

フィールド調査を実施するにあたり、大井川葛布織元の村井龍彦氏、村井良子氏、川出幸吉商店の川出英通氏、掛川手織葛布組合、甌島郷土館、洋々閣大河内はるみ氏からのご教示をいただきましたことを深く感謝いたします。

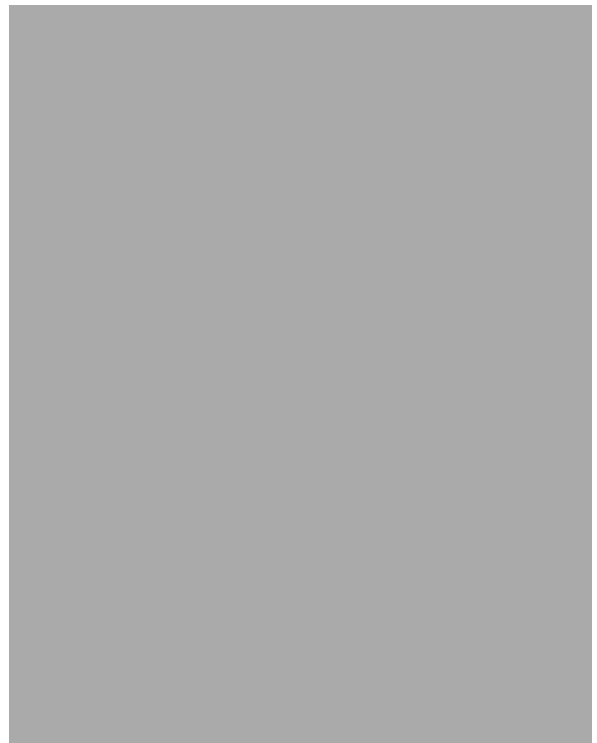
《注》

- 1) 葛 (*Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi) は日本の山野に自生するマメ科植物で、英語名は 'kudzu' として知られる。葉は3出複葉で小葉は草質で幅広く大きく、蔓は地面を這い節から根を出しながら根付く。赤紫の豆の花が咲くのは秋で、果実は枝豆に似ている。葛は北海道から九州以外にも、中国からフィリピン、インドネシア、ニューギニアに分布している。沖縄には同属のタイワンクズ (*P. montana* (Lour.) Merr.) があり、クズに似ているが葉の形や花の姿などに若干の差がある。葛は荒地に多く、人手の入った藪によく繁茂し、その生長はすさまじく木から新しい枝が上に伸びると、それに巻き付いてねじ曲げてしまうこともある。
- 2) 布目順郎：目で視る繊維の考古学、染織と生活社、221 (1992)。
- 3) 柳田国男：木綿以前の事、創元社、東京 (1925)。
- 4) 岡村吉右衛門：庶民の染織、衣生活研究会、大阪 (1976)。
- 5) 岡村吉右衛門：日本原始織物の研究、文化出版局、東京 (1977)。
- 6) 文化庁文化財保護部：無形の民俗文化財記録 第26集 紡織習俗II 島根県・鹿児島県、財団法人国土地理協会、東京、49-81 (1981)。
- 7) 東一愛：下甌島郷土誌、下甌島役場、461-463 (1977)。
- 8) 千田百合子：下甌島 葛布の庶民衣、染織 α 、216 (2002)。
- 9) 唐津市近代図書館蔵。
- 10) 松尾鏡子：絲と色 松尾鏡子織選、瑠璃書房、東京、47-52 (2006)。
- 11) 佐藤為義：西日本織物の民俗誌、葦書房、福岡 (1987)。
- 12) 静岡県小笠社会科サークル：郷土の伝統工芸織「掛川の葛布」、静岡県小笠社会科サークル編、静岡 (1976)。

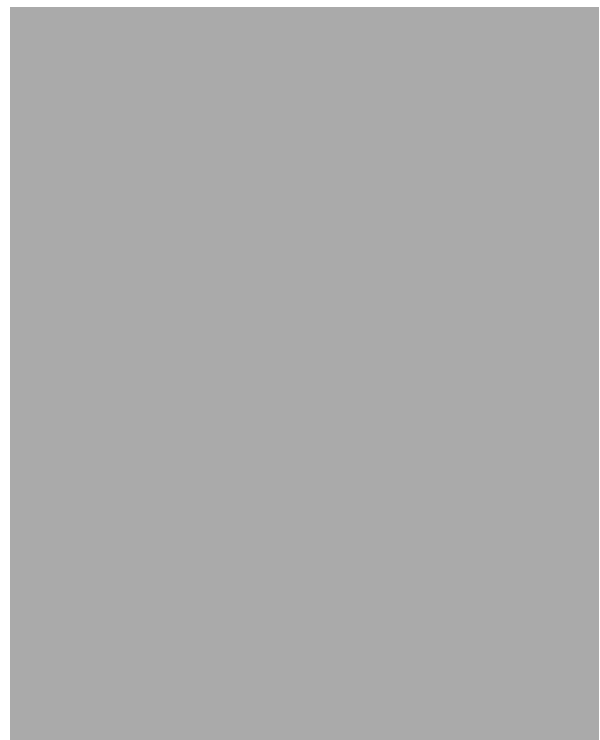
- 13) 掛川手織葛布組合：葛お製造の手引き、掛川手織葛布組合編（1982）。
- 14) 内田旭：掛川名産葛布の由来、静岡県郷土研究 第6巻、国書刊行会、東京（1939）。
- 15) 戸塚一郎：葛布の研究、静岡県掛川東高校郷土研究部、静岡（1952）。
- 16) 外村吉之介：掛川の葛布、工芸、日本民芸協会編（1934）。
- 17) 外村吉之介：葛布帖、求龍堂、東京（1980）。
- 18) 葛布製染織品は、福岡市博物館、日田市広瀬資料館、日本民芸館、個人により収蔵されている。
- 19) 「特別展 藤織りの世界」京都府立丹後郷土資料館編、京都（1981）「もめん以前のこと」展－藤布・葛布・科布－、町田市博物館編、東京（1983）。
- 20) 「もめん以前のこと」展－藤布・葛布・科布－、町田市博物館編、東京（1983）。
- 21) <http://www.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp><http://www.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>
- 22) 記録担当者は、鹿児島県文化財専門委員、小野重朗、鹿児島大学、小林孝子教授、明治百年記念館建設調査室、向山勝貞主査。
- 23) 唐津市近代図書館蔵。
- 24) 野間吉夫：佐志の葛布、私家版、16-17（1965）。
- 25) 大河内はるみ氏の解説を参照した。
- 26) 国立国会図書館蔵。
- 27) <http://www.kuzufu.com/seikaturoku01.htm>
- 28) 明治五年冬、鶴田清次、佐々井半十郎撰 明治八年十二月 中嶋仰山画、鶴田清次校訂。
- 29) 柳田国男：私共の祖先は何んな着物を着て居ましたか、斯民家庭（1911）。
- 30) 柳田国男：木綿以前のこと、岩波文庫、東京、26（2004）。
- 31) 静岡県小笠社会科サークル、16（1976）。
- 32) 静岡県小笠社会科サークル、17（1976）。
- 33) 静岡県小笠社会科サークル、18（1976）。
- 34) 静岡県小笠社会科サークル、21（1976）。
- 35) 静岡県小笠社会科サークル、44（1976）。
- 36) 2007年8月に掛川・金谷地区での調査実施。2007年12月に甑島での調査実施。
- 37) 鹿児島県薩摩川内市下甑町手打1031番地
- 38) 下甑村歴史民俗資料館：民具図録集、下甑村歴史民俗資料館編（1981）。
- 39) 下甑郷土館蔵。
- 40) (有) B（芙蓉）工房。下甑島瀬々野裏150。
- 41) 静岡県掛川市掛川551-2 掛川商工会議所内 <http://www.kuzufu.jp>
- 42) 岡本葛布工房 静岡県掛川市下俣1025
- 43) 小崎葛布工芸 静岡県掛川市城下3-4
- 44) 川出幸吉商店 静岡県掛川市仁藤町7-3
- 45) 大井川葛布 静岡県島田市金谷河原1747 <http://www.kuzufu.com>
- 46) 松尾（2006）、52。
- 47) 文化庁文化財保護部、16。
- 48) 村井良子、私信。



図一 「山にて葛の蔓を刈り取る。蔓をくくる。葛の蔓を茹でる。」「製葛録」大蔵永常著 文化十一年 二十二丁表 国立国会図書館蔵。



図二 「ゆでたる蔓を川へつけるところ。河よりあげて薦または刈藁に被せて蒸すところ」『製葛録』大蔵永常著 文化十一年 二十二丁裏 国立国会図書館蔵。



図三 「むしたる蔓を河にて洗いあら枝をさりぬる。もぎたる枝をこきあげて干す。葛苧。むしたるつる枝をもぎとる」『製葛録』大蔵永常著 文化十一年 二十三丁裏 国立国会図書館蔵。



図四 「葛苧をさきてつなぎ糸車にてくだにとる。葛布を織る」『製葛録』大蔵永常著 文化十一年 二十五丁表 国立国会図書館蔵。



図五 「織あげたる葛布の結び目をきざみとり艶つける」『製葛録』大蔵永常著 文化十一年 二十六丁裏 国立国会図書館蔵。



図六 「教草 第七 葛布一覽」 明治五年冬 鶴田清次 佐々井半十郎撰 明治八年 中島仰山画 鶴田清次校訂『教草』丹波修治等著、溝口明耕等画 明治五～八年 国立国会図書館蔵。




図七 「クズタナシ半襦袢」(左：前面) (右：部分) 下甌郷土館蔵。
左図は「民具図録集」下甌村歴史民俗資料館編 (1981) より転載、右図は筆者撮影。



図八 「クズタナシ長着」(左：前面) (右：部分) 下甌郷土館蔵。
左図は「民具図録集」下甌村歴史民俗資料館編 (1981) より転載、右図は筆者撮影。

染織工芸技術の変遷




a. 葛の生蔓

b. 生蔓の採取

c. 採取した生葛を束ねる

d. 葛束を蒸す




e. 蒸した葛束を水に浸ける

f. 室を作る

g. 室からだした葛

h. 芯抜きをして水で濯ぐ



i. 葛芋のつぐり

j. 水に浸けたつぐりを絞
り杼に入れて織る

k. 葛布
(経糸:手紬木綿、緯糸:葛)

l. 砧うち

図九 葛布の製作工程（平成十九年八月、大井川葛布ワークショップ、筆者撮影）



図十 高機で葛布を織る。村井良子 大井川葛布織元。

(see p. 52)

[Summary]

Transformations in Craft Techniques:
A Case Study of Manufacturing Techniques
and the Use of *Kudzu* Cloth

FUKATSU Yuko

Continuous research, preservation and documentation for intangible cultural properties of historic textiles are necessary to succeed them to the next generation. This paper discusses the transformations of manufacturing techniques for *kudzu* cloth, known as ‘grass cloth,’ and its use in costumes and interior design. The paper also reexamines methods of documentation and preservation of intangible cultural properties, especially of manufacturing techniques for historic textiles. First, the historical background and the use of *kudzu* cloth are researched, and manufacturing techniques by current manufacturers are documented. The results of research are collated with documentation regarding *kudzu* cloth from the nineteenth century and the 1960s in order to show the transformations of manufacturing techniques and the uses of *kudzu* cloth. As a result, it may be said that prototypes of textile manufacturing techniques in Japan are found in the technique of manufacturing *kudzu* cloth. At the same time, it is pointed out that *kudzu* cloths have survived in the Japanese textile culture until today, transforming in their uses, such as for costumes of aristocrats in the Nara and Heian periods, warriors’ costumes in the Edo period, and exported wall cloth in the Meiji period. Also it has become clear that the use of fibers such as *kudzu*, “a type of weeds,” for manufacturing textiles is not only rooted in ancient technology but also closely related to global environmental issues and preventive conservation. In that sense, *kudzu* cloth could be an ecological textile in the 21st century.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage
Number 2
2008

Publisher:
National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第2号

平成20年3月28日印刷

平成20年3月31日発行

編 集 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

| | | |
|------|--------------|---------|
| 編集委員 | 無形文化遺産部 部長 | 宮田 繁 幸 |
| | 音声・映像記録研究室長 | 高 桑 いづみ |
| | 無形文化財研究室長 | 鎌倉 恵 子 |
| | 成城大学講師 | 星野 絃 |
| | 法政大学能楽研究所 教授 | 山 中 玲 子 |

発 行 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
電話 03 (3823) 2241

© 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所 2008

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo